

2019年7月23日

報道関係者各位

慶應義塾大学病院

289グラムで出生した超低出生体重児が20歳に —成人した超低出生体重児として日本最小—

1999年に慶應義塾大学病院において、妊娠23週289グラムの超低出生体重で生まれ、同病院小児科新生児病棟を退院した女児が、2019年6月、20歳になりました。

この女児は当時、世界で3番目に小さい体重で生まれましたが、成人を迎えた日本人としても、最小出生記録となります。

1. 289グラムで出生した女児について

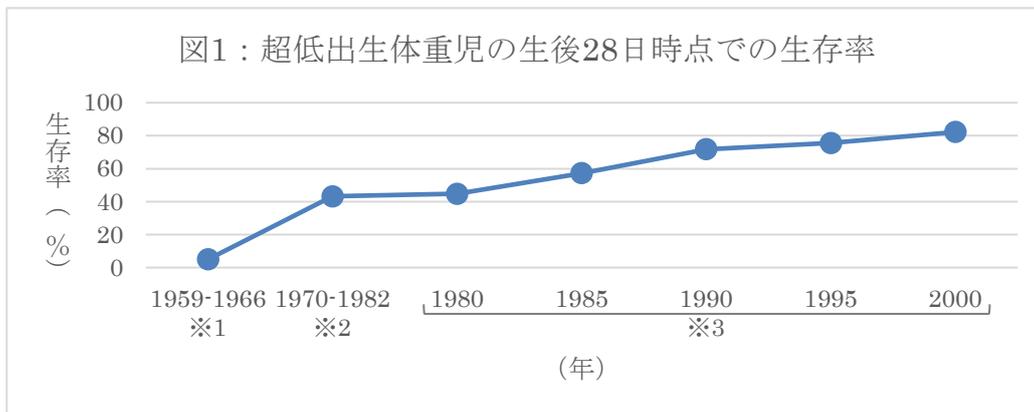
新生児医療の進歩はめざましく、日本において1000グラム未満で出生する超低出生体重児の救命率は最近では約90%とされています。一方、1990年代までは超低出生体重児の救命率は低く、*The Tiniest Babies* (注1)によると、過去(2019年7月23日現在)に出生体重300グラム未満で生存退院した児は世界で28人ですが、そのうち2000年までに退院した児は3人に過ぎず、当時300グラム未満の児の救命は、現在の10倍以上難しかったと言えます。世界で初めて成人を迎えた出生体重300グラム未満の赤ちゃんは、1938年にイギリス・タイン・アンド・ウィア州(サウス・タインサイド)にて、妊娠34週283グラムで出生した女児です。

今回ご報告する女児は、1999年に慶應義塾大学病院において妊娠23週289グラムで出生し、今年6月に20歳になりました。現在、企業で就業しています。

2. 超低出生体重児の救命率の変遷について

超低出生体重児とは、出生体重1000グラム未満で生まれた赤ちゃんのことです。出生体重が小さい赤ちゃんは、体のさまざまな機能が未熟なため、呼吸障害、心不全、消化管穿孔、重症の感染症などが起こりやすく、救命が困難です。1960年代の救命率は10%未満でしたが、2000年代になると80%を超えるようになりました(図1)。

救命率が上昇した理由には多くの要因がありますが、日本においては、全国の周産期母子医療センターの整備、妊娠中の母体管理体制の整備、NICUの整備と医療技術の進歩、医療費の補助、医療従事者の献身的な努力が特に重要だと考えられます。



※1、※2

Baillieres Clin Obstet Gynaecol. 1993 Sep;7(3):611-31.

Outcome of infants born preterm, with special emphasis on extremely low birthweight infants. Nishida H. (当該期間に出生した児の生存率)

※3 日本小児科学会雑誌 106 巻 4 号 P.603-P.613

「我が国の主要医療施設におけるハイリスク新生児医療の現状」

3. 家族・本人のコメント

・母親のコメント

「とても小さく生まれた子でしたが、検査のときに血液が流れるのを見て、初めて抱っこしたときに温もりを感じ、ちゃんと生まれてきてくれたんだと安心しました。

当時の看護師さんとの交流も続いていて、20歳の誕生日も一緒にお祝いをしました。誕生日を迎えたときには、『20年、生きてくれたね。』と喜びが込み上げました。成人式で着物姿を見るのが、今から楽しみです。」

・本人のコメント

「周りの友達にも恵まれ、20年間楽しく過ごしてきました。学校にも元気に通い、高校3年間は女子バスケットボール部で毎日のように部活動に励みました。就職して2年目になりますが、今は週に2日間パソコンスクールにも通って勉強しながら、頑張っています。私を産んでくれて、ここまで育ててくれた両親に、感謝しています。」



写真1：出生後（集中治療中）



写真2：2018年11月（京都旅行）

[参考]

(1) The Tiniest Babies (注 1) による出生体重 300 グラム未満の赤ちゃん (出生年順)

	出生年	出生国 (州)	出生体重	妊娠週数
1	1938	イギリス	283 グラム	34 週
2	1989	米国	280 グラム	26 週
3	1999	日本 (慶應義塾)	289 グラム	23 週
4	2000	米国	290 グラム	25 週
5	2001	ドイツ	290 グラム	23 週
6	2002	イタリア	285 グラム	27 週
7	2004	米国	260 グラム	25 週
8	2005	ドイツ	270 グラム	25 週
9	2006	米国	284 グラム	21 週
10	2006	日本 (慶應義塾)	265 グラム	25 週

(全員が女兒)

(2) 慶應義塾大学医学部小児科学教室について

日本周産期・新生児医学会 周産期専門医制度 (新生児専門医) の基幹研修施設です。新生児病棟は NICU (Neonatal Intensive Care Unit: 新生児集中治療管理室) 9 床、GCU (Growing Care Unit : 回復期治療室) 18 床と都内では中規模ながら、今回の妊娠 23 週 289 グラムで出生した女兒 (1999 年) や、妊娠 25 週 265 グラムで出生した女兒 (2006 年、当時世界で 2 番目に小さい赤ちゃん)、妊娠 24 週 268 グラムで出生した男児 (2019 年 2 月時点、当時世界最小の男児) を元気に退院させた実績があります。

【注釈】

(注 1) The Tiniest Babies : アイオワ大学のデータベース。主治医による登録制で、世界中の小さな赤ちゃんに関するデータが集められている。

<https://webapps1.healthcare.uiowa.edu/TiniestBabies/index.aspx>

※ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

※本リリースは文部科学記者会、科学記者会、厚生労働記者会、厚生日比谷クラブ、各社科学部等に送信しております。

【本発表資料のお問い合わせ先】

慶應義塾大学病院 小児科
 助教 有光 威志 (ありみつ たけし)
 TEL:03-5363-3816 FAX : 03-5379-1978
 E-mail: arimitsu@z8.keio.jp
<http://pedia.med.keio.ac.jp>

【本リリースの発信元】

慶應義塾大学病院
 総務課 : 鈴木・山崎
 〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35
 TEL : 03-5363-3611 FAX : 03-5363-3612
 E-mail: med-koho@adst.keio.ac.jp
<http://www.med.keio.ac.jp/>